

## 作品概要

本作品では「実在や現在とは何なのか」という問いに対し、映像と身体、トレース（その場を写し取ろうとする行為、ドローイングのようなもの）を通して模索する。「目の前のものにはズレがある」ことを示すため、ビデオカメラとプロジェクターを用いて二通りの状況を設置する。

一つは「Recording（録画）」。  
リアルタイム映像をプロジェクターで投影し、投影される像に対してトレースを施す(写真1)。

もう一つは「Replay（再生）」。  
「Recording」を記録していた映像を、既に描かれたドローイングの上から等身大サイズで投影させて再生する（写真2）。

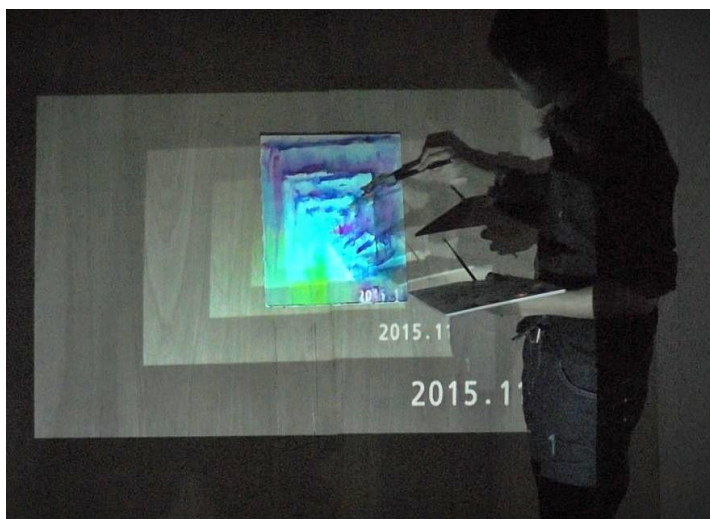


写真1 Recording



写真2 Replay

① 実在や現在へ行きつくまで

筆者はこれまでの制作において自身の存在（世界の存在）について疑問を投げかけてきた。それは現在の自分自身の身体や精神（他にもあるかもしれない）という存在に対する疑問である。大学学部生においては主に彫刻制作による実在物を通しての探求を行ってきた（写真3,4）。当時は身体という面における追及が強かったため、人体に関する制作を一貫して行っていた。しかしそれは大学院修了制作時には、自分の人格の分裂を意識したことによって、「私」の絶対的な存在に対する疑問として内面的な精神へのベクトルも含めるようになっていく（写真5）。



写真3 「Born」 (2012)



写真5 「鉄塔」 (2014)

写真4 「人は自然の前に否応なく浮遊する」(2013)

② 「Recording (録画)」と「Replay (再生)」

身体と精神の實在という問題に取り組む中で次第に、時間とりわけ現在という感覚に対しての疑問に直面するのは必然だったのかもしれない。そして実在物としての存在の中にある「情報」を映し出す、映像とプロジェクターを制作に用いるようになったのもその頃である。そこには同一直線上と思われていた、自身を含めた世界の分離や並列など、広がっていったりズレていったりする感覚が興味の対象となっていた。ここで現在という時間、時点においてその広がり表現したのが「Spread」シリーズである(写真6)。

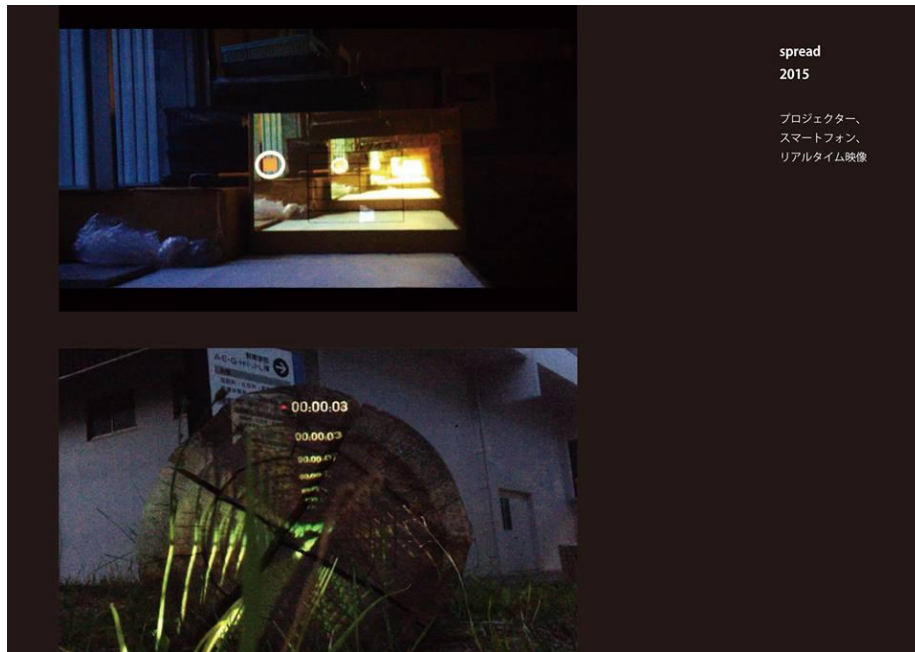


写真6 「Spread」シリーズ(2015)

本作品「Spread -ZURE-」はその中でも現在がズレていく感覚を通して、「現在は過去や未来の時空間と完全に分化しているのではなく、モヤのように淡く織り交ざりながら現在を存在させている」という表現を行っている。それは「Recording (録画)」と「Replay (再生)」の二つの状況を交互に設置して対比させることによって、その相似性を表す。

まず「Recording (録画)」について。使用しているのはプロジェクター、ビデオカメラ、リアルタイム映像、紙、トレース、身体である。ビデオカメラはプロジェクターにつながれ、そのレンズに映るものがそのまま投影される。投影された像をビデオカメラがまた映



し、更に投影される。つまり合わせ鏡のような映像が映し出されるのだ。この前で筆者は紙にトレースを行う。ここでトレースという独自の言葉を使うのは、その状況を視覚による正確な描写ではなく、自身の感覚とともにその状況の痕跡を写し取ろうとする行為だからである（写真7）。筆者の身体とトレースは、徐々にズレていく映像と重なりながら進行していく。この時の筆者の身体とトレースの含有される時間軸は、まさにそれらを映し出しているビデオカメラの映像の含有される時間軸と等しい。



次に「Replay（再生）」について。使用しているのは、プロジェクター、再生機器、記録映像、紙、トレースである。ここに投影される映像は「Recording（録画）」での状況を録画したもの

である。それはその時描かれたトレースの上へ重ねるように映し出される。この状況において、トレースを行っている映像の含有される時間軸と、トレースそのものの含有される時間軸は等しい。

それらの時間軸は「Replay（再生）」されていることによって、単なる過去の再生と断定されてしまうかもしれない。しかしこれらの状況は

写真7 トレース

「Recording（録画）」の時点でも起こり得ると筆者は考えている。まず映像の記録という段階において、「Recording（録画）」であれ「Replay（再生）」であれ、その記録された情報とはあくまで現在とのズレを生じさせた記録であるという意味で同じである。映像の含有される時間軸と、トレースや身体など実在物の含有される時間軸がそれぞれ等しいということも同じである。唯一目に見えて違うことと言えば、「Replay（再生）」にはある意味、未来の結果としてのトレースが存在しているということである。

ここで筆者が明らかにしたいのは、リアルタイムや現在そのものだと思われる「Recording（録画）」においても、徐々にズレていく過去という時間と、既に描かれたトレースのように未来のような時間が、目には見えない感じられないものままで織り交ざっているということである。